

<b>Title</b>	「<午前の部>人形劇団「ふーせん劇場」/<午後の部>オノマトペ(擬音語・擬態語)絵本読み合いワークショップ」報告：2013年度 第3回【子どもの人格形成と絵本】研究プロジェクト 第2回子どもの育ちと絵本研究會
<b>Author(s)</b>	越智, 裕子
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.24-No.1, 2014.9 : 28-29
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5145">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5145</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

2013年度 第3回【子どもの人格形成と絵本】研究プロジェクト 第2回子どもの育ちと絵本研究会

「〈午前の部〉人形劇団「ふーせん劇場」/

〈午後の部〉オノマトペ(擬音語・擬態語)絵本読み合いワークショップ」報告

2014年3月8日(土) 聖学院大学エルピスホールにて、第3回子どもの育ちと絵本研究会が、「オノマトペ(擬音語・擬態語)の世界を人形劇で体感する」というテーマで開催された(上尾市教育委員会・さいたま市教育委員会後援(午前・午後)、上尾市こどもの読書活動支援センターの共催(午後))。

〈午前の部〉人形劇「ボードヴィル、こぎつねコンとこだぬきボン」

午前の部では宇奈月やつ子氏が主宰する人形劇団「ふーせん劇場」(中村ともみ, 三喜秀一氏)による音楽人形劇が催された。午前の部は親子、大学生、関係者等、総勢81名の参加であった。

伴奏音楽は生演奏で、作曲、シンセサイザー演奏に金子浩介氏、バイオリン演奏に金子弥香氏をお招きした。参加者は小さな子供たちを連れてご家族の方々が大半を占めた。会は石川由美子氏(聖学院大学人間福祉学こども心理学科教授)の司会から始まった。谷川俊太郎の言葉を引用し、また宮沢賢治の童話「雪渡り」にある「かた雪かんど、しみ雪しんど」のオノマトペを紹介しつつ、オノマトペと言葉と関係、この関係から生まれてくるいきいきとした言葉の生命が子供たちの成長に与える重要な役割について触れている。このオノマトペの世界を具体的に体感してもらおうと、人形劇が実演されたのである。演目は、1. ボードヴィル「虹色かばさんOne・Two」(言葉を使わず音楽を奏でた人形劇)、2. 人形劇「こぎつねコンとこだぬきボン」である。「虹色かばさんOne・Two」においては小さな劇の合間々々に、「ふーせん劇場」の中村ともみ氏が、楽しい質問をしながら、子供たちの感情を大きく開いていく。

石川氏はこの劇を「オノマトペがふんだんに使われ、ささやかな生活の一場面が、やさしい会話を通し、繰り返しの構造を持った物語として進行

するもので、こうした物語が子どもの育ちにどのような影響を持つのかじっくり感じながら見ていただきたい」と紹介した。音楽を背景に、実演者の宇奈月氏のセリフまわしもまた明るく音楽的で、子供たちの反応に合わせて、アドリブでセリフ変え、子供たちを劇の中に巻き込んでゆく。その劇の進展の仕方に合わせて、演奏者も自在に伴奏を付けるのである。舞台のすぐ前は、椅子ではなく座敷が引いてあり、小さな子供たちの多くが家族と一緒にそこで観劇している。舞台の盛り上がりとともに、子供たちは興奮し、立ち上がって様々な反応を見せるのであった。舞台終了後、宇奈月氏はコンちゃんと、ボンちゃんのぬいぐるみとともに、出入り口の側に立って、一人一人の子供たちとお話をしたり、写真を撮影に応じたりしていた。こうして午前の部は盛況のうちに終わった。

(文責：堺 正貴 [サカイ・マサタカ] 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程2年)



左上：石川教授、左中：金子浩介氏、金子弥香氏  
左下：宇奈月やつ子氏、右上：午前の部、右下：午後の部

## 〈午後の部〉「オノマトペ（擬態語・擬音語）絵本読み合いワークショップ」

午前の人形劇に引き続き、オノマトペ絵本（もこもこもこ）の魅力を身体で体感することを目標に、宇奈月やつこ氏、金子浩介氏（シンセサイザー）、金子弥香氏（ヴァイオリン）によるワークショップが開催された。ワークショップの参加者は親子、聖学院大学学部生、卒業生、研究者、一般応募のかたなど総勢50名となった。

司会の石川由美子氏より「子どもがいきいきと育つ（生活する）ためのオノマトペ」と題して、オノマトペがなぜ子どもの育ちに重要であるかの解説がなされた。

オノマトペは、言葉をいきいきとさせるものであること、また普通の言葉との交流で生まれるオノマトペの音声は、あたかもひとが楽しく歌っているかのような音声になることを述べた。すなわち子どもの育ちには、声と共に音楽も重要な影響を与える要素となる。子どもは胎児の時から母親の声を聞いている。音楽と声、その両者に共通なのは協和音である。子どもは、生まれつき、選択的に、この協和音を好む。氏は谷川俊太郎（2013）の「言葉は自分の外にある」を引用し、オノマトペには、自分の外にある言葉を内に取り入れる働き一方で、自分の内の情動や感情を外に表現するための橋渡しの役割があることを示唆した。

ワークショップは、宇奈月やつこ氏（ふーせん劇場主宰）が、オノマトペ絵本「もこもこもこ」の読み合いを通し、オノマトペの体感化を図っている。オノマトペを体で表現するための基本は、柔軟な動きと腹式発声にあるとし、ワークショップは、参加者全員での体操と、自分の声の出し方を意識する発声練習から始まった。

次に5人一組で5グループ作り、「もこもこもこ」のフレーズ（オノマトペ、21語）を選択し、そのイメージを各グループおよび個々人で自由に表現する時間を持った。氏は、絵本の読み聞かせは、もっと静的なものであるが、今、身体で表現したよう

なイメージを持って声を出すことが重要であると述べていた。

次に、参加者は、絵本「もこもこもこ」をバイオリン奏者金子弥香氏の演奏表現、およびシンセサイザーによる金子浩介氏の演奏表現で鑑賞した。それぞれの楽器や奏者により、そのイメージ表現は大きく異なる。従って、それを聞く側は、多様な感覚を刺激されることになる。このことが子どものことばの豊かさにもつながると思われた。

最後に、宇奈月氏の声による「もこもこもこ」（オノマトペ、21語）の読み表現を、0歳から6歳の子どもたちとともに鑑賞した。宇奈月氏は身体で表現したオノマトペのイメージを声に変換して、参加者を声の音楽表現で楽しませてくれた。0歳からの子どもたちが宇奈月氏の1声1声に、身体で反応し聞き入る姿が印象的であった。

オノマトペと言葉の交流および声、音楽など協和音が生み出す絵本の読み合いは、子どもの育ちに多面的な彩を添える。そのような媒介物を通した読み手と聴き手の相互交流は、子どもの人格形成に大きな役割を果たすと考えられた。

（文責：越智裕子 [オチ・ユウコ] 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化科学研究科博士後程3年）



グループワーク風景